

The way of
WINNING



伊藤は総合馬術の
耐久審査をノーミ
スでゴールした

昨年11月の全日本学生三大大会（インカレ）で本学は18年ぶりに団体総合優勝を果たした。1年生からレギュラーに抜きされた「Wエース」の上原佑紀（生物資源科4）・茨城・土浦日大高）と伊藤昌展（同・同・若菜学園高）に加え、2010年インカレ障害飛越王者の鳥谷部健太（同・青森・三本木農高）、総合馬術2位の梅田敬仁（同・三重・高田高）や4位の小野敬司（同・岡山・倉敷鷺羽高）、馬場馬術準優勝の天谷幸枝（商4）・茨城・真壁高）らが着実に力をつけ近年になく厚みのある戦力が整った結果だ。

馬術はパートナーである馬の体調の良し悪しが勝敗を左右する。「馬の扱いが日本一の大学が、インカレで優勝できる」と主将の伊藤は考え、これまで以上に馬に気を配るよう心がけ、小さな体調の変化も報告することなどを部員全員に徹底した。

「人のミスで馬にけがをさせたら申し訳ない。それが、真剣に試合に臨む姿勢だということを下級生に伝えたい」と。

昨年6月の関東学生三大大会では障害飛越で鳥谷部が、総合馬術で上原が優勝するなど好成績を残し、42年ぶりに全3種目を制し総合優勝を遂げた。前哨戦で、インカレ17連覇中だった宿敵・明大を抑えての優勝に選手は手応えを感じた。

大学馬術は大会のほとんどが東京都世田谷区の馬事公苑で行われる。しかし昨年のインカレは、初めて兵庫県三木市の三木ホースランドパークで開催されることになった。本学は、三木ホースランドパークでの大会に何度か出場し、インカレに備えた。

インカレは1週間の長丁場。大会中は朝5時に宿舎を出発し車で20分ほどの会場に向かい、試合開始まで

の3時間に馬が寝泊りするきゅう舎の掃除や、準備運動を行う。試合が終わればきゅう舎で作業し、宿舎に帰るのは夜7、8時。夕食後にミーティングを行い、その後は馬の様子を見にきゅう舎に戻ったり、スコアの集計などで就寝は深夜になる。「毎日くたくたになる」生活が1週間続いた。

最初の障害飛越で団体2位と好スタートを切った。個人では伊藤が準優勝、上原が4位と活躍した。

馬場馬術での予選は天谷が2位、上原が9位で通過。同決勝では天谷が2位に0.075点と小差で初優勝、上原は4位に入った。団体は明大に次ぐ2位。団体総合優勝のためには、最終種目の総合馬術で明大を上回ることが絶対条件となった。

調教審査（馬場馬術、耐久審査（クロスカントリー）、余力審査（障害飛越）の3種目で争う総合馬術には、伊藤、上原、梅田、小野、鳥谷部の5人がエントリー。調教審査では上原が首位となり、伊藤が2位、小野が4位になるなど好発進した。

耐久審査は伊藤が全選手のなかで唯一の減点ゼロでゴール。上原は規定タイムをオーバーしたが完走した。しかし小野がコースアウト、梅田と鳥谷部が落馬し失権。ライバル・明大も2人が落馬した。諸岡慶監督は「うち（日大）が3頭も失権するなんて前代未聞。明大さんも失権するなんて信じられない話だ」と驚きを隠せなかった。明大の選手は「善ら着いて完走してれば、タイムオーバーで減点されても失権は避けられたはず。団体総合の優勝が懸かる明治と日大は、攻めの走りをし

ないとけなかった」と述べた。

余力審査では暫定1位の伊藤が障害を一つ落とし、2位に着けていた上原がノーミスでゴールし逆転で優勝を決めた。総合馬術は団体5位に沈んだが、悲願の団体総合優勝を手にした。

全種目で入賞したエース上原は

「4年生の意地で勝ち取った。サポートしてくれた後輩や同期生、全ての方に感謝している」と笑顔で話した。主将の伊藤は「部員全員がやるべきことをこなし結果が出た。欲を言えば、関東学生みたくに全3種目で優勝したかった」と振り返った。

充実の戦力で もぎ取る

馬術
全日本学生三大大会
18年ぶり団体総合優勝

吉田 薫＝文・写真
text and photograph by Kaoru Yoshida

